

J-J.ルソー『人間不平等起源論』[1755=2008] Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les homes 中山元訳、光文社古典新訳文庫

■ 序

・「人間たちのあいだの不平等の起源を解明するには、まず人間そのものについて知る必要がある…。自然が創造した人間のほんらいの姿というのはどのようなものだったのか、時と経過と事物の変化を通じて、人間のほんらいのありかたに何が生じたのか。…」(33-34)

■ 二種類の不平等

・「わたしは人類には二種類の不平等があると考えている。一つは自然の不平等、または身体的な不平等と呼びたいものである。…もう一つは社会的（モラル）または政治的な不平等と呼びたいものである。」(49-50)

■ 自然人（野生人）

・【欲求は満たされている】:「…[神から]うけとることのできたすべての超自然的な賜物と、長い期間をかけて進歩することで獲得できたすべての人為的な能力をとりのぞいてみよう。一言でいえば、自然の手を離れたばかりに違いない状態にある人間を調べてみよう。この生き物は他の動物よりも力は弱く、敏捷さでも劣るが、全体としてみると、すべての動物の中でもっとも有利に構成されていることが分かる。わたしにはこの生き物が樾の木の下で満腹になって、最初にみつけた小川で渇きを満たし、食事[のための木の実]を与えてくれた樾の木の下に寝床をみつけているのが目に浮かぶ。これで[食べ物、飲み物、睡眠の場所という]彼のすべての欲求は満たされているのである。

・【動物の本能を模倣】:「大地はその自然の豊かさのままに放置され、斧が一本の木も倒したことのない広大な森林で覆われている。すべての種の動物は[この大地を]歩むたびに、食料の宝庫と隠れ家をみいだすのである。動物たちのあいだに散らばって暮らしている人間たちは、動物たちの巧みな業を観察しながら模倣することで、その動物の本能の高みまで昇るのである。動物のそれぞれの種には固有の本能が定められているが、人間にはおそらく固有の本能というものが欠けているので、すべての動物の本能をみずからのものとして獲得する。そして他の動物たちが分かちあっている様々な食べ物の大部分を、みずからの食べ物とする。このように人間には、他の動物にはできないほどたやすく食べ物をみつけられるという利点があるのである。」(59-60)

・【群れない生活】:「野生人は動物のあいだに散らばって生きていたのであり、早い時期から動物と力比べをする機会があったから、自分を動物と比較するようになる。そして動物が力で勝っているとしても、自分は抜け目なさで動物よりも勝っていると考えようになり、動物を恐れないことを学ぶのである。」(62-63)

・【身体的弱さ】:「野獣よりも恐れるべき別の敵として、生まれつきの病弱、幼少期、老衰、あらゆる種類の病気があり、人間はこの敵から身を守る術を知らないのである。これは人間の弱さを示す悲しむべき徴候である。」(64)

・【安心して眠れない】:「野生人は、孤独で、何もすることがなく、しかもたえず危険に脅かされているために眠ることを好むに違いない。そしてものを考えない動物と同じように浅い眠りに落ちているに違いない。動物はいわば何も考えていないすべての時間を、眠っ

ですごしているのである。野生人は自分が生き延びることだけを心掛けていると言ってもよいくらいであり、もっとも磨き上げられた能力は、おもに攻撃と防御のための能力にちがいない。」(71)

■ 文明人の弱さ

・「わたしたちの生活様式には極端なまでの不平等がある。暇で困っている人がいる一方では、働きすぎの人もいる。わたくしたちの食欲や情欲はすぐに刺激され、満足させられる。富める者は凝りすぎた美食で消化不良を起こし、滋味[栄養があつて味のいいこと]のために便秘となっている。一方で貧しき者には粗食しかなく、その貧しい食事すら欠くことも多い。そして栄養不足のために、何か食べられる機会があると腹いっぱいになるまで詰め込むのである。あるいは夜更かしやその他のさまざまな種類の不摂生、あらゆる情念の手放しの発散、精神の消耗、無数の悲哀と苦痛を考えてみよう。こうした悲哀と苦痛は、身分にかかわりなくあらゆる人々が経験するものであり、魂はこれによって永遠に蝕(むしば)まれるのである。／これこそ、わたしたちを苦しめる悪の多くは、わたしたちがみずから作りだしたものだという忌まわしい証拠である。自然が私たちに定めている簡素で、むらがなく、孤独な生活をしていれば、こうした苦しみはほとんど避けられたはずなのである。自然がわたしたちに健康であることを運命として定めたのであれば、思索の状態は自然に反したものであり、瞑想する人間は墮落した動物であると断言したいほどである。」(66-67)

・「馬でも猫でも牛でもロバでも、人間の家で飼われている個体よりも、森の中で暮らしている個体の方が背が高く、体格もたくましく、元気で、力と勇気に満ちていることが多いものだ。それが家畜として飼われるようになると、これらの利点の半ばを失ってしまうのである。私たちがこれらの動物を大切に育て、十分な栄養を与えようとすると、その配慮のために動物たちは退化してしまうかのようだ。／これは人間についても言えることだ。群れて暮らすなかで隷従している人間は弱く、臆病で、卑屈になってしまう。柔弱(にゅうじゃく)で女々(めめ)しい暮らしぶりをしていようと、体力も気力も萎(な)えてしまうのだ。また森の中で生きる動物と家畜の違いよりも、野生人と家で暮らす文明人の違いのほうが大きいことも指摘しておくべきだろう。」(68-69)

・「初めて衣服や住宅を作った人は、じつは無用なものを発明したのだということは、どう考えても明らかである。」(71)

■ 動物と人間の違い

・「人間と動物に固有の違いは、知性があるかどうかではない。人間が自由な行為者であるという特質こそが、動物と違うところである。…人間の意志する力、むしろ選択する力と、この力の自覚のうちにみいだされるのは、人間の純粋に霊的な行為」である。(74)

・【自己改善能力(ペルフェクティビリテ)】:「人間と動物を区別する別の特別な特質」は、「人間にはみずからを改善していく能力が備わっているということである。これは環境の力を借りて、次々とあらゆる能力を発展させていく力であり、この能力は主としての人間にも、個体としての人間にも存在している。これに対して動物の個体では、数か月のあいだにすべての能力の発展が終わり、その後は一生をつうじて変わることがない。」(74-75)

・【情念と理性の関係】:「モラリストたちがどう言おうと、人間の知性は情念に多くのもの

を負っているのであり、誰もが認めるように、情念も人間の知性に多くのものを負っているのである。人間の理性は知性と情念の活動によって完全なものとなるのだ。わたしたちが何かを知りたいと思うのは、何かを楽しみたいと願うからである。だからいかなる欲望も恐怖もない者が、理性を働かせるように努めることなど、考えられないことである。そして情念もまた欲求から生まれ、知識とともに発達する。…しかし野生人にはいかなる種類の知識も欠けているために、自然のたんなる衝動という情念しかない。野生人の欲望は、身体的な欲求を超えることがないのである。」(77)

■ 言語の起源

・どのようにして言語が必要とされるようになったのか。「人間の最初の言葉、もっとも普遍的で、もっとも力強い言葉、集まった人々を説得する必要が生じる前に人間が必要とした唯一の言葉、それは自然の叫びである。」(88)→「人間の持つ観念の範囲が広がり、その数も増えて、人々のあいだで緊密な交渉が生まれるようになると、多数の記号が必要になり、さらに広範な言語が必要とされた。」(88)→「そこで人々はやがては、身振りの代わりに分節化した音声を利用することを思いついたのである。…しかし音声を身振りの代わりに利用するには全員の合意が必要である。…これについて合意するのは困難なことだったのであろう。」(89)

■ 言語と社会の人為性

・「わたしは次の難問について議論するのは、どなたか希望される方にお任せしたいと思う。その難問とは、さまざまな言語が発明されるためには、すでに社会が設立されていることが必要なのか、それとも社会が設立されるためには、すでに言語が発明されていることが必要なのか、という問いである。」(95)

→「どちらが先であったかは別としても、少なくとも自然は人間たちをたがいの欲求によって近づけ、それによって言葉の使用を促進するための配慮はほとんどしていないのだから、人間が社会的な存在となるように準備していなかったこと、そして人間がこうした[社会的な]絆を確立するために、自然がほとんど手を貸していないことは、すぐに分かるだろう。」(96)

■ 文明人よりも幸福な野生人

・「そもそも文明人においては悪徳よりも美德が多いのだろうか。文明人の悪徳の忌まわしさは、有益な美德で十分に補われているのだろうか。文明人が新たな知識を獲得することで、たがいに善を行うことを学ぶとしても、それがたがいになす悪を十分に償(つぐな)っているのだろうか。そうしたすべての点を考慮に入れた後で、誰からもどんな悪をうけることも恐れる必要がなく、どんな善をうけることも期待する必要がない[野生人の]状態は、誰もがたがいに依存しあって、すべてのものを自分たちに何も与える義務のない人々からうけとることを義務づけられている[文明人の]状態よりも幸福なのではないだろうか。」(99)

・「ホップズは、…こう結論すべきだったのである。自然状態とは、わたしたちの自己保存の営みが、他者の自己保存の営みを害することの最も少ない状態であり、この状態こそが、ほんらいもっとも平和的で、人類に最も適した状態だったので。それなのにホップズはま

さにその正反対のことを主張する。それはホップズが、野生人が自己を保存しようとする配慮のうちに、社会の産物であるさまざまな情念を満足させる欲求を持ち込むという間違いを犯したためである。」(100)

・「野生人が悪をなすことを妨げているのは、…情念が穏やかであり、悪とは何かについての知識が欠如しているからなのである。『彼らは悪徳の何たるかを知らない。それは美德とは何かを知っている人々よりも善く暮らす上で役立つのである。』」(101) (引用は、ユスティヌス『地中海世界史』第二卷第二章より。)

■ 憐みの情

・【自然の感情】:「ホップズが知らなかった別の原理がある。それは特定の状況においては人間の利己愛(アムール・プローブル)の激しさを和らげるために、あるいは利己愛が発生する前の段階では自己保存の欲求を和らげるために、人間に与えられた原理である。すなわち人間は、自分の同胞が苦しんでいるのを目にすることに、生まれつきの嫌悪を感じるということである。そのために自分の安楽を求める欲望の激しさが和らげられるのだ。これは人間の美德をもっとも激しく糾弾する人[マンデヴィルのこと]すら認めざるを得なかった唯一の自然の美德であり、わたしがこの美德を人間に認めたとしても、矛盾しているという非難をうけることはないだろう。これこそが憐みの情(ピティエ)である。」(102)

・【自然から道徳を導出】:「実際に寛容とは、慈悲とは、人間愛とは何だろうか——それが弱者や罪人や人類一般を対象とした憐みの情でないとしたならば。善意や友情すら、よく考えてみれば、憐みの情が特定の対象に、長いあいだ注がれるうちにうまれたものなのである。というのも、誰かが苦しまないことを望むということは、その人が幸福であることを望むことにはかならないからではないか。」(105)

・「憐みの情が自然な感情であること、これがそれぞれの人のうちに自己愛(アムール・ド・ソワ)そのものの働きを緩めて、種のすべての個体がたがいに保存し合うことを手助けすることは確実なのである。この感情があるからこそ、わたしたちは苦しんでいる人を見ると、何も考えずにその人を助けたいと思うのである。そして自然状態においても、この感情こそが法と習俗と美德の代わりをするのである。自然状態の善さは、誰一人としてこの感情の優しい声に逆らおうとする人がいないということである。」(107)

■ 利己愛と哲学

・「利己愛を作り出すのは理性の力である。そして省察がそれを強める。省察においては人間は自己のうちに閉じこもるのである。人間は省察しているあいだは、自己を苦しめ悩ませるものから遠ざかる。哲学こそが、人間を孤立させるのである。哲学の力によって人は、苦しむ人を眺めても、勝手に死ぬがよいわたしは安全な場所にいるのだからと、ひそかに呟くことができる。」(106)

■ 野生人の情欲

・「野生人は、自然が与えた欲情の声だけに耳を傾けるのであり、みずからうけとることのなかった趣味【悪趣味】(1782年版)に耳を傾けることはない。彼は、女であれば相手を選ばないのである。／愛の肉体的な要素だけしか働かず、愛の感情を口やかましいものにし、充足させるのを困難にする選り好みという感情を知らないために幸福だった人間は、

それほど頻繁に激しい情欲を感じることはなかったに違いない。そのため人々のあいだの争いは稀であり、争いがあったとしてもそれほど激しくはならなかっただろう。」(111)

■ 自然人の平等性

・【第一部の結論】:「森の中を彷徨(ほうこう)する野生人はとくに知恵を働かせることもなく、言葉を話さず、家ももたず、たがいに闘うこともなく、他人と交際することもなく、同胞を必要としないし、同胞に危害を加えようと望むこともない。おそらく同胞の誰一人として見分けることもできない。こうした野生人は情念の虜(とりこ)となることもほとんどなく、自分だけで満ち足りており、こうした状態にふさわしい感情と知識しかもっていない。本当に必要とするものだけを欲求し虚栄心も発達しなかった。」(114-115)

・「実際に、人間たちにおいて確認されているさまざまな違いのうちで、自然なものに見なされている多くの違いも、ほんとうは習慣とか、人間が社会のうちで身につけた生活様式の違いなどによって作られたものにすぎないのである。だから身体の逞しさや虚弱さとか、これによって生じる強さとか弱さとかいうものは、生まれつきの体質によるものではなく、その人が厳しく育てられたか、軟弱に育てられたかによって決まることが多いのである。」(116)

・「野生人の動物的な生活は素朴で、どこでも同じである。野生人は誰もが同じものを食べ、同じように暮らし、まったく同じように行動する。これを考えれば、文明状態と比べると自然状態では人間のあいだの違いがどれほど小さなものであったか、制度的な不平等によって、どれほど人類の自然の不平等が拡大せざるを得なかったかが、分かっていうものである。」(116-117)

・「ある人間を隷属させようとするならば、まずその人を他人なしでは生きてゆけない状態におく必要がある。自然状態ではこのようなことは起きないのだから、この状態では人間はあらゆる軛(くびき)から自由であり、最も強い者の法も無力なのである。」(119)

■ 安楽への欲求こそ「悪」の根源

・「最初の革命の時代」:精神が発達すると、人間は、自分の住居を作り、家族ごとに分かれて住むようになり、財産というものをもつようになる。(131)

・「ともに暮らすという習慣のうちで、人間において知られているもっとも優しい情愛である夫婦の愛と父性愛が生まれた。それぞれの家はいわば小さな社会のようなものとなった。」(132)

・「この新たに状況においても人間たちは素朴で孤立した生活を送っていた。満たすべき欲求は限られたものであり、その欲求を満たすために新たな道具を発明していたから、暇な時間は多かった。この時間を使って、それまでの祖先の人々には知られていなかったさまざまな安楽を作りだしたのだった。ところがこれこそが、知らず知らずのうちに人間が自らの首にかける最初の枷(かせ)となったのであり、子孫のために残した最初の悪の源だったのである。というのも、人間の身体も心もこのようにして柔弱になりつづけただけでなく、こうした安楽が習慣になると、とくにありがたいものではなくなる一方で、それなしでは過ごせない欲望の対象となったのであった。」(133)

■ 不平等の発生(第一段階):美德と所有権の確立

・「さまざまな観念と感情が次々と生まれるうちに、人間の精神と心は鍛えられ、人類は穏やかになってゆき、結びつきは広まり、絆が固められる。人々は小屋の前に集まったり、大木のもとに集まったりすることに慣れた。恋愛と余暇の真の産物である歌と踊りが、群れ集う暇な男女にとっての娯楽となり、むしろ仕事のようなものとなった。誰もが他人を眺め、誰もが他人に眺められたいと思うようになる。こうして公の尊敬をうけることが重要になり始める。もっとも巧みに歌う者や巧みに踊る者が尊敬され、もっとも美しい者、もっとも強い者、もっとも巧みな者、もっとも雄弁な者が、もっとも尊敬されるようになる。これが不平等が発生するための、そして同時に悪徳が生まれるための最初の一步となったのである。このような人々のうちでとくに尊敬される者が選び出されるようになると、一方では虚栄と[劣った者への]軽蔑が生まれ、他方では恥辱の念と[優れた者への]羨望の念が生まれたのである。」(135-136)

・「原初的な状態にある人間ほど優しい人間はいない。この状態では人間は自然の力によって獣の愚昧さからも、文明の人間の忌まわしい知識からも同じように隔てられていたのであり、本能と理性の力によって、自分を脅かす悪から身を守ることを教えられていた。」(137)

・「…一人でできる仕事や、数人が手をあわせるだけで可能な技術に専念しているかぎり、人々はその本性によって可能な範囲で、自由で、健康で、善良で、幸福に暮らしていた。そしてそれぞれが独立して暮らしながら、他人と交際する楽しさを享受していたのだ。しかし一人の人間が他人の援助を必要とするようになった瞬間から、また一人で二人分の食糧を確保しておくのは有益であることに気づいた瞬間から、平等は姿を消し、私有財産が導入され、労働が必要になった。そして広大な森はのどかな原野へと姿を変えたが、この原野を人々が汗して潤すことが必要になった。」(140)

・才能の不平等が、経済的境遇の不平等を拡張する。(145)

■ 不平等の発生（第二段階）：卓越主義社会とその弊害

・【悪徳の発生】：「人間のあらゆる能力はすべて発揮され、記憶と想像力が働きだし、利己愛が利害に目覚め、理性が活発に働き始め、精神は可能なかぎり最高の完璧さにまで到達した。人間のあらゆる自然的な能力が発揮されるようになり、それぞれの人がもつ財産の大きさや、他人を害したり助けたりする力量、知能、美貌、体力、器用さ、そしてさまざまな資質と才能などによって、すべての人の序列と境遇が定められたのである。そしてこうした特質がなければ、人々の尊敬をうけることができなくなると、こうした特質をもっているか、もっているふりをするしかなくなる。実際にある自分とは違う姿を見せることが利益になるのである。[そうで]あることと、[そうであるかのように]みえること、すなわち実態と外見がまったく別のものになったのである。そしてこの区別から、他人を威圧するような威厳、人々を欺く悪賢さ、これに伴うすべての悪徳が生まれたのである。」(146)

・【従属関係の発生】：「そしてかつては独立していた人間が、いまや多数の多様な欲求のために、いわば自然全体に、そして他人に従属するようになった。…金持ちであれば他人の奉仕を必要とするし、貧乏であれば他人の援助を必要とするからである。」(147)

・「一方では競争心と敵愾（がい）心が生まれ、他方では利害の衝突が生まれる。どちらにしても、他者を犠牲にして自分の利益を計ろうとするひそかな欲望が働いているのである。私有財産がこれらのすべての悪をもたらした。」(148)

・「富める者の横領と貧しい者の略奪が、そしてすべての者の放埒な情念が、自然の憐みの情を窒息させ、いまだか弱い正義の声を圧（お）しつぶした。こうして人間たちは貪欲で、野心家で、邪悪な者となったのだった。」(149-150)

・【**勢力欲**】:「人よりも抜きんでたいという欲望（こうした欲望はいつでもわたしたちにみずからを忘却させる）」→「人間のうちで最善のものと最悪のもの、美德と悪徳、学問と誤謬、征服者と哲学者、すなわち多数の悪しき事柄とごく少数の善き事柄が生まれる」(180-181)

■ 不平等の発生（第三段階）：自由の喪失／権威への服従

・「自由は無垢や美德と同じようなものだということ、すなわちそれを享受しているあいだしかその価値を感じることができないのであり、それを失うと、すぐにその味すら忘れてしまうものだということである。」(162)

・【**野生人の自由**】:「調教された馬は鞭や拍車に辛抱強く耐えるが、馴らされていない馬は、轡（くつわ）を近づけただけで、たてがみを逆立て、地面を踏みならし、狂ったように暴れる。同じように野蛮な民は、文明人が文句も言わずにしたがっている首枷（くびかせ）に、決して首を差し出したりはしないだろう。そして穏やかに屈従することよりも、危険に満ちた自由を選ぶのである。」(162)

・【**高貴な能力**】:「ここで問うてみたいのは、自由は人間のさまざまな能力のうちで、もっとも高貴な能力であるから、神から賜った贈物のうちでもっとも高貴なものを、いかなる留保もなしに放り捨ててしまってもよいものだろうか、残忍であったり、狂っていたりする主人に気に入られようとして、創造主が禁じているあらゆる罪を犯すまでに、みずからを貶（おとし）めてもよいものだろうか、ということである。」(166)

・【**自由の譲渡不可能性**】:「プーフェンドルフは、人間は合意や契約によって自分の財産を他人に譲渡できるが、これとまったく同じように、自分の自由も他人に譲渡することができると主張する。これはきわめてまずい議論だと思われる。」(167)→奴隷契約の正当性問題

・【**子供への贈物**】:「そもそも自由とは、子供たちが人間としての資格によって自然から授かる贈物なのであり、[父親が自分の自由を売りわたして奴隷となったならば、その子供たちも奴隷となることが定められているために、子供はその自由を失うことになるが、]両親は子供たちからこの贈物を取りあげる権利などもっていなかったのである。」(168-169)→奴隷制への反対。

・【**卑屈な人間**】:「そもそも他人に命令するなどまったく望まない者を服従させることは至難の業であり、どんなに巧みな政治家でも、ただ自由であることだけを願う人間を屈服させることはできないのだ。しかし野心に駆られる卑屈な人々のあいだでは、不平等は容易に広がる。こうした人々は、いつでも運を天に任せて危険を冒そうとしているので、運がよければ支配し、運が悪ければ服従するだけのことで、どちらでも構わないのである。」(178)

・【**専制政治**】:「身分と財産の極端なまでの不平等から、さまざまに異なる情念と才能から、無用の技芸から、有害な技術から、軽薄な学問から、理性にも幸福にも美德にそぐわない無数の偏見が生まれることになろう。国家の首長たちは、結集した人々の力を弱め、分裂させるためにあらゆる策略を企てるだろう。外面的には社会に和合の雰囲気があるように

みせかけながら、実際には不和の種を蒔くために、さまざまな階層の権利と利害を対立させるだろう。…／専制政治は、このような無秩序と変革のさなかから、次第にその醜悪な頭をもたげ、国家のすべての部分において善良で健全なものと思われる一切のものを貪り、やがては法と人民を足で踏みにじり、共和国の排除のうちに、みずからの権力を確立するようになるだろう。」(183)→「これが不平等のゆきつくところ、究極の場所である。」(184)

□メモ：ルソーの思考に従えば、(1)専制政治を克服するためには、人間のさまざまな能力が美德として開花するような、卓越主義の共和国を形成することが望ましい。しかし、(2)それでもなお生じる人間の悪徳を抑制するためには、美德よりも個人の高貴な自由を重んじる社会を形成することが望ましい。高貴な野生人からなる社会の理想。

■ 文明人の弊害

・「野生人はみずからのうちで生きている。社会で生きる人間は、つねにみずからの外で生きており、他人の評価によってしか生きることができない。自分が生きているという感情を味わうことができるのは、いわば他人の判断のうちだけなのである。」(188)

・「どうして都市の人間は、これほどの哲学と、人間愛と、礼儀と、崇高な格言に囲まれながら、自分が誰であるかをみずからに問うことなく、他人に問うようになったのだろうか。わたしたちには人を欺くような軽薄な外見しかなく、美德のない名誉しか、叡智なき理性しか、幸福なき快樂しか残されていないのである。」(189)